

新たな花きの一大産地を目指して

名 称：特定非営利活動法人 Jin （代表 ^{かわむら} 川村 ^{ひろし} 博）

所在地：双葉郡浪江町

【浪江町の避難指示解除状況】

・平成 29 年 3 月 31 日 居住制限区域及び避難指示解除準備区域が解除

【プロフィール】

平成 17 年に特定非営利活動法人 Jin（以下、「Jin」という。）を設立。高齢者等のデイサービスの他、震災後はトルコギキョウ、リンドウなどの花き栽培を開始。浪江町花卉研究会会長。

【被災前の経営と避難状況】

震災前、Jin では高齢者や障がい児者のデイサービス、リハビリ施設等を運営するとともに、約 3ha の畑で無農薬・無肥料での野菜栽培、鶏、ヤギ、ウサギを飼育。原発事故により、川村さんは福島市に避難。その後 Jin は、浪江町避難者のために県内 3 か所（福島市、二本松市、本宮市）に設置されたサポートセンター等の運営を担い、避難者生活を支援。

【取組の内容】

川村さんは、ふるさとの美しい風景を維持するためには農業が一番と考え、平成 24 年 4 月に浪江町に隣接する南相馬市に「サラダ農園」（平成 25 年 4 月からは就労継続支援 A 型事業所・生活介護事業所）を設立しました。これにより、各地に避難していた高齢者や南相馬市に住んでいる障がい者が、畑で野菜などの農作業に従事でき

るようになりました。

平成 25 年 4 月に、元々事業所であった浪江町幾世橋地区が避難指示解除準備区域に再編され、日中の立入が可能になりました。このため、元の農園を活用し、南相馬市と同様の「サラダ農園」を開始し、野菜栽培（当時の野菜出荷制限 4 品目^{*}を除く）のほか、鶏、ウサギの飼育を再開しました。

※野菜 4 品目は H29. 3. 14 に摂取・出荷制限解除（帰還困難区域除く）

川村さんは、浪江町の再生には、農業を通じた町づくりが必要と考えていました。当時は野菜 4 品目に出荷制限があったものの花きは出荷可能であったことから、福島県農業総合センター（以下、「農総センター」という。）と浪江町担当者からのアドバイスを受け、平成 26 年からトルコギキョウ（ハウス 10a）とリンドウ（露地 6a）の栽培を開始しました。栽培技術は農総センターや双葉農業普及所からの指導を受けることができました。また、同年には、農総センターが福島県営農再開支援事業により花きの実証栽培（トルコギキョウ、リンドウ、カンパニュラ）を行いました。その実証ほ場を提供しました。

平成 26 年 8 月には、トルコギキョウを京浜市場に初出荷しましたが、最初は 50 円/本程度と必ずしも高い評価を受けた訳ではありませんでした。しかし、市場関係者からアドバイスを受け、徐々に品質を改善し、収穫後期には 200 円/本の高い価格で取り引きされるようになり、花き栽培を軌道に乗せることができました。



Jin 代表 川村博さん

川村さんは、花き栽培と Jin の活動を通じて、若い人を町内に呼び込むことができると考え、「家族経営で、手取り 1,000 万円/年以上の経営モデル」を構築しました。

さらに、平成 27 年には、農総センターが実施したトルコギキョウの後作の「ストック、カンパニュラ、キンギョソウ」の試験栽培に協力しました。いずれもトルコギキョウの収穫後、9 月～10 月定植、12 月から翌 3 月頃にかけて収穫する体系です。

平成 28 年には、長野県松本市で花きを栽培し、国際博覧会で受賞歴がある（株）フラワー・スピリットを何度

も訪問し、高い栽培技術を学びました。より高品質の花きを栽培し、オリジナルブランド「Jin ふるーる」のほか、特にトルコギキョウは、（株）フラワー・スピリットの許可を得て「フラワー・スピリット（N）」のブランド名でも市場出荷し、いずれも高価格で取引されています。

平成 29 年は 34a のハウスで、夏にトルコギキョウ、冬期にストック、キンギョソウを栽培しています。トルコギキョウは 30,000 本を出荷し、ストック 15,000 本、キンギョソウ 10,000 本の出荷を見込んでいます。



ストック

そのほか試験的にヒマワリ、フリージア、小菊、輪菊の栽培にも取り組み、多品目での周年出荷を目指しています。花き以外には、小麦（30a）、大豆（30a）、ブドウ（14a）、ダイコン（10a）、鶏（110 羽）のほか漬物などの食品加工にも取り組んでいます。

【取引先、技術習得】

花きの取引先は、大田市場卸売会社の「（株）フラワーオークションジャパン」（以下、「FAJ」という。）で、栽培

技術の指導だけでなく、産地化についてもアドバイスを受けています。また、FAJ は年に一度、全国の優良な花き産地を「FAJ OF THE YEAR」として表彰していますが、「Jinふるーる」の品質の高さが認められ、2017 年に優秀賞を受賞しました。



FAJ OF THE YEAR 2017 優秀賞 (浪江町提供)

平成 27 年から 2 か年に渡り、農総センター浜地域研究所と連携して、ICT を活用した栽培管理の試験にも取り組みました。ハウスの温湿度状況などがスマートフォンに転送されるため、遠くにいても必要な環境管理を指示できるシステムです。将来の施設栽培には不可欠な技術と考えています。

花き栽培に取り組み始めて 4 年目になりますが、試験研究機関や普及所からの技術的なサポートに加え、市場関係者からのアドバイスにより、高品質の花き生産が可能になりました。現在では檜葉町やいわき市からも花き農家が視察に訪れるようになっています。



トルコギキョウ

平成 29 年 8 月に、「花・夢・創 (はなむそう) みらい塾 浪江町花卉研究会」が設立され、川村さんが会長に就任しました。研究会は、町内で花き栽培に取り組もうとしている農家や新規就農者ら 13 名で構成されています。Jin のハウスや茨城県などの先進地で栽培技術を学ぶほか、市場関係者との意見交換などにより、花きの生産・流通・消費情報を勉強しています。



出荷前のラッピング状況

浪江町も花き産地化の支援に取り組んでおり、平成 30 年度からは、花き栽培に挑戦する農家を全国から募集し、技術習得を支援する取組みを模索する予定です。

【課 題】

生産農家の高齢化や後継者不足により、労働力不足が一番の課題となっています。これからは花き生産の機械化を進めることが必要であり、今がそのチャンスと捉えています。

【目標・将来構想】

パイプハウス面積は、平成 30 年には 63a に拡大する予定ですが、将来は 2ha の団地化を目指しています。売上額は、平成 34 年に 1 億円にすることを目標にしています。また、花き栽培の先進国オランダでは、大規模ハウスで機械化が進んでいることから、浪江町でも大規模で工場に近い花づくりを実現したいと考えています。

川村さんは「若者の力で浪江町を花きの一大産地にしたい。」と話し、それには、収益性の高い花き生産を実践し、その実績を示すことが第一と考えています。さらに、「Uターン・Iターンに関係なく 20 代、30 代の若い人が町に来て花を栽培してほしい。若者が増えれば、元気で活力ある浪江町になるはず。」と夢を語ってくれました。

(平成 30 年 2 月)